

(第1回) 浪曲大会 「伝承し飛翔する・繋ぐ名跡！」 10月15日



6~70年前、家のラジオから流れる「旅行けば~あ~駿河の~お国にい~茶の香り~」に、首を振りながら調子を合わせる父親の傍に居たのが、浪曲との出会いでした。数年間はそんな茶の間の風景でしたが、以降は浪曲に触れることなく、後に歌謡界で三波春夫、村田英雄、二葉百合子の歌謡浪曲を耳にするだけでした。最近になり親戚の娘が浪曲師にデビューしたこともあり、偶に高座に足を運ぶようになり、テレビ、ラジオでも番組が増え、少しずつ人気を取り戻しつつあるようです。でもまだまだマイナー、中年を含む若い人達に浪曲とか浪花節と言うと、きょとんとして“それな~に?”。

質問を受けて、調べました。

明治時代初期から始まった演芸で、落語、講談と共に「日本三大話芸」のひとつとされ、最盛期の昭和初期には、全国に3000人の浪曲師がいた。三味線を伴奏に用いて物語を語る。古くから伝わる浄瑠璃や説教節、祭文語りなどが基礎となって大道芸として始まり、その後明治時代初期、大阪の芸人、浪花伊助が新しく売り出した芸が大受けして、演者の名前から「浪花節」と名付けられた。以後、桃中軒雲右衛門や二代目広沢虎造の活躍で戦前まで全盛を迎える。庶民的な義理人情に訴える作品の他、武芸もの、出世もの、任侠もの、悲恋もの、ケレンものと呼ばれるお笑いなど多種多様で、親子の愛、師への尊敬、忠義、礼節など、次世代に伝えたい「誇るべき日本」の姿を肩の張らないスタイルで表現している。

浪曲は主に七五調で演じられ「泣き」と「笑い」の感情を揺さぶる。時代に翻弄されつつ、いつも人々の心に寄り添ってきた芸能である。

一つの物語を「節」と「啖呵」で演じる。節は歌う部分で物語の状況や人物の心情を歌詞にしており、啖呵は登場人物を演じてセリフをはなす。重視する順を「一声、二節、三啖呵」という。前の

二つを「声節」と呼び、特に重要視する。落語は「話す」講談は「読む」浪曲は「語る」と言われる様に、聴かせところがことなる。

日本の古典芸能への懐かしさと再興への応援の気持ちで、会員の皆様へ初めてご案内を致しました。日本浪曲協会主催の年一回の第55回浪曲大会「伝承し飛翔する・繋ぐ名跡！三代目広沢菊春襲名披露興行」、10月15日浅草公会堂での開催でしたが、浪曲ファンで懐かしいと称する5名の方のご参加を頂きました。会場は500名ぐらいのファン、男女半々、年齢は高め、騒めきの中に熱気が伝わります。

11時開演、緞帳が開きます。

舞台中央に金屏風。その前に腰ぐらいの高さのテーブルを置き、花や動物など演者の個性を表現した模様のテーブルかけが掛けてある。相撲の化粧回しの様にファンが浪曲師に贈るものであり、金糸で寄贈者の名前、会社名が記してある。右手には曲師と呼ばれる三味線の演奏者が座っている。



第一部始まる。出し物は、「那須与一」、「横綱玉の海」、「寅さん20作目の男はつらいよ」(中村正俊、大竹しのぶの声色入り)、「大久保彦左衛門」、「妻は夫をいたわりつー」の名文句の「壺坂霊験記」、菊池寛の名作「父帰る」とバライティーに富んだ題目に惹きつけられ、どれも大筋は知っていて、とても面白い。前列のオジサン、浪曲師のセリフ、節回しに合わせて機嫌よく小声で唸っている。

る、年期入りのファンです。



第二部は、本日の目玉公演、大名跡襲名、三代目広沢菊春の誕生です。黒紋付姿の浪曲協会お歴々が居並ぶ中央に、若手の逸材澤勇人氏が位置し、厳粛な襲名披露の口上が続きます。澤孝子師匠の生前の思いに応え、浪曲界の再興に向けて牽引役を期待します。



お祝いの前舞台は、澤一門順子、恵子、雪絵の三人の浪曲師掛け合いの浪曲三重唱「日本婦道記」。山本周五郎の短編名作「不断草」、登野村三郎兵衛と離縁した菊枝と姑の三人の心の機微を描いたやり取りを見事に演じ、息がぴったり合い、気合の入った出来栄でした。



そして、真打登場。三代目広沢菊春師匠の「徂徠豆腐」、江戸時代の儒学者荻生徂徠の不遇の時に豆腐屋から受けた恩を、出世後に恩返しする話を、奥様の美舟氏の三味線を伴奏に、張りのある声で熱演、立派な晴れ姿でした。

第三部、お祝いの熱気が残る中で、先ずは若手

前座7名のお披露目。初々しい所作、若々しい声音に、浪曲界のこれからの発展が期待されます。



その後は、現在の浪曲界を代表する浪曲師が登場、一番バッターが私の親戚、国本はる乃、浪曲界の最若手で、25歳。張りのある声、情感籠る語り口で、「堀部安兵衛」を語る。上達ぶりが伝わり、観客の評価も高く、将来性が期待される。東家一太郎は、江戸の花形火消し「野狐三次」、男っぷりを語り、玉川奈々福は、「天保水滸伝からボロ忠」の義侠心を語り、港家小柳丸は鉄道工事を背景に火花を散らす男たちの熱い物語、「亀甲組加太山」を語る。ト리는長谷川伸の名作生き別れた母を探す人情物、「瞼の母」を三門柳が演じる。大ト리는浪曲協会会長東家三楽が平家の落ち武者と頼朝の不興を買った与一との物語を語る。珍しい横笛が入り、情感描写に一役果たす。



7時間に亘る浪曲を昼食を忘れ、たっぷり楽しみました。皆様の感想を伺いながら、次のご案内を考えます。尚、浅草木馬亭では、毎月月初に浪曲の定席が催されていますので、お試しください。

(掲載写真：森幸一) (文：山田清實)